

高次脳機能障害者支援・工房かたつむり(倉敷)

# オンラインで 集団リハビリ

交通事故や病気が原因で、脳に後遺症が残る高次脳機能障害者を支援するNPO法人「工房かたつむり」(倉敷市西坂)は、オンラインを通じて専門家による集団リハビリを行っている。新型コロナウイルスの影響で、運営する作業所に講師を招いての開催は困難になったが、手法を変更して切れ目ない支援に取り組んでいる。(山内悠記子)

かたつむりは、高次脳機能障害者を中心とした中四国初の作業所として2004年、家族らが開設した。現在、記憶や言葉、感情の制御などがうまくできなくなる高次脳機能障害を持つ倉敷、岡山市の30〜60代の9人が利用し、社会参加に向けて軽作業などに取り組んでいる。

集団リハビリも活動の一環で、川崎医療福祉大(倉敷市松島)言語聴覚療法学科の教員や学生が週1回、事業所で開いている。昨春の緊急事態宣言の発令を受け、昨年3

## コロナ下 切れ目なくサポート



月から半年間休止を余儀なくされたが、症状が悪化する恐れがあることなどから、昨年10月、ビデオ会議システム「Zoom」は、同学科の時田春樹准教授が担当し、利用者7人が参加。准教授が準備

5月16日からの宣言再発令に伴う休止をはさみ、今月2日から再開した。9日に開いたりハビリアは、同学科の時田春樹准教授が担当し、利用者7人が参加。准教授が準備

した多くの数字を印字したプリントを使って、30番台と70番台の数字に丸を付ける作業を通じて前頭葉を活性化するトレーニングに取り組んだ。受講した高尾晃正さん(39)＝同市西坂＝は「コロナ禍で人と接触する機会が少なくなっている。機能維持の訓練が続けられて本当にありがたい」と笑顔。時田准教授は「感染リスクが抑えられる上、定期的の様子を見守ることができるので私たちも安心。コロナ禍が収束するまで続けていきたい」と話す。

川崎医療福祉大とオンラインで結び、脳機能を活性化させるトレーニングに取り組む利用者ら

かたつむりの高尾明美所長(65)は「付き添う家族も情報交換したり悩みを相談したりできる。利用の輪が広がれば」と願っている。